

かなり大切な話をしている二人が、実はそれぞれ相手ではなく、別のもの（携帯電話やスマホなど）を見ている。これでいいのだろうか？という問いかけを聞いたことがあります。携帯電話などが身の回りにあり、ちょっとした調べ物が簡単に済むという利点はいまさら言うまでもありませんが、一方はたしてこれでいいのだろうか、と思うことも増えてきたように思います。

直接の会話とは異なり、メールは空き時間を利用して打てる、日時が正確に伝わるなどのメリットがあります。けれども、直接会うことで、相手の表情やしぐさ、時には健康状態などが分かり、自分が考えていた話の内容そのものを考え直し、話の持っていき方を工夫することができ、トラブルにならずに済んだという経験をしたことのある人もいるのではないでしようか？

人と会うには時間の確保、交通機関の利用、服装などの準備が必要で、そう気軽に済ませられることではありません。また、実際に人に会った時には話し方、敬語の選び方など相手や状況により工夫しなければなりません。けれど、そうした人と会う経験の中で人との接し方、話の進め方、合意への

たどり着き方などを学んでいくのではないでしようか。

就職を希望する学生への企業の要望として、人と接し協力して物事をやり遂げる能力、コミュニケーション能力が挙げられるようになっていきます。商談や打ち合わせがメールで済むわけではないでしょうから、企業の要望はもったもなことでしょう。今の学生には情報機器を駆使する能力に加え、そうした情報機器に頼らない基本的人間力が求められているということだと思えます。そのためには、子どもの時から、ゲーム機漬けにしない育て方が大切だと言われます。そうした子どもに育てるには、大人の方もスマホ漬けにならない日常生活が必要ではないでしようか。

情報機器を利用しつつも飲み込まれない生活をする・・・便利な社会とは一人ひとりの自覚と自律が求められる社会なのかもしれません。渦に巻き込まれず人間らしく生きていく、そうした心構えを私も身につけていこうと思います。皆さんはいかが思われますか？

「技術との共存」



※お問い合わせは

人権啓発広報委員会

(☎ 880・6569) まで